

# 第9回「文芸思潮」現代詩賞 発表

## 第9回「文芸思潮」現代詩賞

第9回「文芸思潮」現代詩賞に多数の御応募をいただきまして、まことにありがとうございます。おかげさまで今年も日本全国および海外から四二二名という多くの方にご応募いただき、充実したコンテストとなりました。心から御礼申し上げます。

五月末に締め切らせていただきました応募作の中から、まず選考委員会予選担当によって第一次予選、第二次予選、第三次予選の選考が行なわれました。それらを通過した作品を対象に、九月一六日、松尾真由美、五十嵐勉の各選考委員により、最終選考が行なわれました。厳正な審査の結果、以下の通り決定しましたので、ここに発表させていただきます。

今回もすぐれた作品が多く、高いレベルに達していた作品が少なくなかったことから、「佳作」「入選」を設け、より広く賞揚することにいたしました。

奨励賞および佳作の作品の中にも多くの方に読んでいただきたい作品がたくさんありますので、それらの作品も、できるだけ「文芸思潮」ウェブおよびインターネット誌上に掲載させていただく予定です。御期待ください。

現代詩賞の授賞式は、銀華文学賞、エッセイ賞、イラスト・漫画賞と併せて、明年二〇一四年一月二十五日（土曜日）午後二時より東京都大田区下丸子の大田区民プラザで行なう予定です。受賞者以外の方も御参加できますので、親睦を兼ねて、お誘いの上ぜひ御来場ください。

第10回「文芸思潮」現代詩賞は、明年も今年とほぼ同じ要領で募集を行いません。締め切りは五月三十一日です。どうぞ奮って御応募ください。

「文芸思潮」現代詩賞選考委員会／文芸思潮

### 最優秀賞

「蜘蛛」 清水一美  
(東京都立川市)

「射ゆ獣の冬の旅」「デカダンスじやない  
花と夢」「teatime garden unknown」  
浅見龍之介 (群馬県吾妻郡長野原町)

### 奨励賞

「ゲール・バード」「冬の野」「試作品のラビュリントス」  
御園陽樹 (茨城県土浦市)  
「地面を掘る男」  
大山日文 (埼玉県鶴ヶ島市)

「夜」「白い」「うたた寝」  
深町秋乃 (熊本県熊本市)  
「I saw an earthly paradise there. 私はずいじい地上の  
楽園を見出した」 「Proof」  
水城古都 (長崎県佐世保市)  
「祝祭の灯は消され」「寝台」「巡礼」  
小山 健 (神奈川県大和市)

「五時脱自」「聖別」  
町田理樹 (大阪府大阪市)  
「自然」「エレクトリックサーキット」「貧弱なヒリズム」  
洗本ユリナ (東京都杉並区)  
「麦踏」  
なないろ (岡山県津山市)  
「煙草が吸いたい」「ラストエナジークアンタムステアウェイ」  
「螻蛄から針金虫を取り出す仕事」  
菊池智弘 (群馬県館林市)

「サルサの踊りに」「朝」「家族」  
水田すが子 (神奈川県横浜市)  
「鎮魂歌」「美の終焉」「Discours」  
滝川 閑 (神奈川県茅ヶ崎市)

### 優秀賞

「存在の美しい日々」「確かに僕らにあった」  
「暑い夏が好きだった」  
佐山広平 (愛知県春日井市)

「立体パーキング」「ターミナル」  
「スクランブル」  
江田つばき (千葉県市原市)

「眠れるト音記号、もしくは短歌的惰性の日常」  
小池陽慈 (東京都大田区)

「コオク・スクリウ」「震える水槽 (眠れぬひと)」  
「Sing!」  
日疋士郎 (神奈川県相模原市)

「罪の蜜」「一族の血膿」「軋む識」  
芳賀沼さき (神奈川県横須賀市)



選評



まつお まゆみ  
1961年北海道生まれ  
個人詩誌「ぶあぞん」発行「歷程」同人  
詩集『燭花』（思潮社）  
詩集『密約—オブリガート』（思潮社）で  
第52回日氏賞受賞  
詩集は他に『揺籃期—メッサ・ヴォーチェ』  
『彩管譜—コンチェルティーノ』『睡濫』  
『不完全協和音 consonanza imperfetta』  
『雪のきらめき、火花の湿度、消えゆく蕊  
のはるかな記憶を』（すべて思潮社刊）  
BOX詩集個展用パンフレット詩集  
『装飾期、箱の中のひろやかな物語を』  
現代詩文庫『松尾真由美詩集』（思潮社）  
アンソロジー『現代詩最前線』（北溟社）  
『小野十三郎を読む』（思潮社）『短篇集  
夜』（驢馬出版）  
北海道新聞文学賞（詩部門）選考委員

呼吸と言葉と身体と

松尾真由美

今回の選考を終えて、印象に残ったことがある。一方に、詩とはこういうものだという固定観念のなかで言葉を扱っている作品があり、また一方、固定観念がなく、詩の言葉を伸びやかに扱っている作品があるという、両極面がはっきりと出ていたことだ。詩とはこういうものというものは、おそらく小さい頃から培われた漠然とした印象であって、本当のところ核心がない。思いこみの囲いに言葉を入れこもうとすることは実際には不自由さがある。詩（表現行為）とは日常性から脱出する手段でもあって、日々の思いこみから抜けださなければ、作品からの発見もない。詩は定型ではない。あえていえば形式も自分で創りだしていくことが自由詩の一つの機能である。固定観念を取り払うにはまず沢山の他者の詩に接することであり、

読まずにして書くということには無理があると思う。

そして、詩の言葉が伸びやかであるというのは、作者の呼吸が言葉と一体になっているのが第一で、そうした身体的リズムを作者が芯から得ていれば、言葉が勝手に動き、自分が考えてもいなかったことが詩の言葉によって自分から引き出される。発見とはこのようなものであり、こうした詩の言葉を連ねることで詩形も自ずと定まってくる。

当選作の浅見龍之介氏の「射ゆ獣の冬の旅」は、身体的リズムで言葉を発して、主体の呼吸が良く解る。だから、紙面ではぶつぶつと切れた印象の一字あけも必然を感じさせる。この作品の諧謔は主体の客観性から出ていて、自身の絶望のようなものに溺れておらず、そのため実体験から世界へ大きく展開する。一見、言葉遊びのようで読者も楽しく読める作品だが、韻を含め、言葉と言葉の繋がりも基本的なものを踏まえた上の飛躍があり、その言葉の自在感と主体の解放感がともにあるからこそ、作品の着地点（終行）になだらかな希望がある。

もう一つの当選作の清水一美氏の「蜘蛛」は浅見龍之介氏の作品とは対照的だ。漢語を駆使し、イメージを一步一步丁寧に進ませながら、対象を捕えていく。飛翔よりも前進が詩を切り開くことにつながる清水氏のリズム感覚は、胆力があることで作品の時空を広げる。母—自己—子への三代の流れを、原始から始めるところは非常な意欲作であり、言葉の動きが主体の腐身まで迎えていく。惜しむらくは、漢字の重さに耐えきれない言葉の形容の弱さがいくつも見られたことだが、大きな主題を「蜘蛛」と名づけたことも詩の力を感じさせる。

優秀賞の小池陽慈氏の「眠れるト音記号、もしくは短歌的惰性の日常」は、ト音記号というモチーフを形状や性質などからイメージを遺憾なく膨らませる。微視的なものから巨視的なものへの往還は、実際の小さな記号から音の大きな広がり根底にあり、それゆえ、浮薄感を免れる。小池氏もリズム感の良い詩人であって、詩の高揚を読者も楽しめるだろう。ただ、選んだ一篇ではなく、既定の三篇の作品を送っていたら良かったと思う。優秀賞の江田つばき「ターミナル」は若い作者が無理なくその感性を発揮し、それが明るさや可愛らしさにつながっていて、好感が持てる。場に

佳作

- 「穢れた血」 「巨人族の末裔」 「獣臭」 城帖智徳
- 「ボニー&クライド」 「追憶」 「太陽」 伊藤美香
- 「ドーブ」 「動揺するモールス」 「食卓」 冰瀬 憂
- 「老犬半助」 「一殺の本」 「幻肢」 岩崎 明
- 「母を恋うる」 竹内秀子
- 「たった独りのきみ」 「煩惱」 「謎」 遠藤芳子
- 「詩人の行為」 「宿題」 「闘え、詩人たちよ！」 青木由弥子
- 「愛する子供たちへ」 「ビンの器の絆は尊い」 「白い骨」 西條由美子
- 「独楽」 「独り旅」 「余剰」 植野高志
- 「再生」 「渚にて」 上田 勝
- 「なぜメルヘンは死に際にも敬虔な微笑みを浮かべることができたのか」 「夜域」 「記憶の犬」 漆原正雄
- 「おいたち」 「最期の蟹」 「そのひぐらし」 きくるたかを 浅井かおり
- 「いつもマイナス」 「寄終」 「飽食」 貝塚マナ
- 「町中のアニミズム」 山吹たかし
- 「サブジェクト」 「影奏」 「待留」 柿沢正志
- 「新しき血よ」 草野理恵子
- 「ポケット」 「どこか知らない場所で」 他 羽鳥美希
- 「Kについて」 横井純子
- 「終わりは必ず来るが」 「戸惑う傷」 「自然の姿」

- 「世界の正しい終わり」 「どこまでも残酷」 他 榊 一威
- 「空を飛んだ 星になった」 「あらわにする人 あらわになる事」 「僕は堕ちても清いといえるだろうか」 香川尚子
- 「半鐘」 「つつじ径」 「不意の日の馳走のために」 植田儀武
- 「ザツと、ゴールド」 岡崎 師
- 「花園」 千草ちとせ
- 「アスパラ」 中之島 潤
- 「渚」 「共鏡」 「葉山葵」 五十月彩
- 「漂白鼠と落日の部屋」 三国 武
- 「人間」 下釜美和子
- 「種子のさざめき」 「円と垂直」 「名称という名の濁音を踏み鳴らして」 北上 遥

対する敏感さに周囲の人たちをまき込むことで、少しだけ振れた空間が現出し、この振れが詩的転換をもたらす。

同じく優秀賞の日正士郎「Sign」は三篇の中で一番詩として昇華されている。あえて形を替えての提示だと思いが、この作品は言葉を軽やかに用いることで、他の作品に見られる自己主張がない。雨の雫のひかりが美しく、その美しさが単純でないのは、実は作者の持つ辛さからの脱出口になっっているからだ。そこで救われるのは主体だけではなく、読者ともに明るさに導かれる。

優秀賞の佐山広平の「確かに僕らにあった」は、思い出をモチーフにして思春期の時期の微妙な人間関係を描いている。不器用な恋は青春の証しのように読者の共感を呼ぶのだが、作者がテーマに引きずられて言葉に無駄がある。もう少し書きこんだあとで言葉を削る作業をしてはどうだろうか。作品化する意識をもっと強く持つてほしい。

優秀賞の芳賀沼さきの作品は、三篇とも回文で作られ甲乙をつけがたい。漢語を主として回文を作るとは難しいことだろう。ここまで徹底して個人的にできているのだから、こうした作品で詩集を一冊にまとめることを勧めたい。

奨励賞の水田すが子の「サルサの踊りに」にはサルサから動きそのものを抽出する。生命体の動きが主体の想念に動きを与え、対峙する人間同士の隔たりが主体の混濁を呼び入れ、そのことで想念がより膨張し、言葉の舞踏に発展している。見ることを詩として意識する成功例である。

同じく奨励賞の菊池智弘「蝸螂から針金虫を取り出す仕事」は、タイトルの面白さで解るように発想が虚を突いている。ここでの蝸螂には象徴性があり、それは、ほくもあの子も含まれる人間もともにある。無邪気そうに潰される蝸螂とその行為を行う主体とが、同じ作品内で像として重層でさけるのは、作品の構成力が優れているからだ。

奨励賞の町田理樹「聖別」は切迫感に満ちた足取りで最後まで読ませる。部屋の中で主体は守られておらず、得体の知れない微妙な恐怖は、精神(肉体)を閉じることと開くことへの交錯に向かわせる。それが詩の膨らみとなる。ただ、「罪の悦楽」「性の陶醉」など使い古された言葉は要注意。ひらがなを用いた柔らかい表現でいいものがあるので、そちらを伸ばすことを考えてほしい。

同じく奨励賞の大山日文の「地面を掘る男」は淡々と進む言葉が、主体が地を掘る熱心さにつながっている。メタ詩としても読めるが、大仰な表現は押さえた方が読者は説得されることを覚えてほしい。また、奨励賞の洗本ユリナの「貧弱なニヒリズム」は一行ごとに言葉の流れが留まってしまっていて、それが断言的に響いて来る。いわば読者を弾き飛ばしてしまっているのだ。言葉を動かす能力があるのに、作品が動いていかないのは惜しい。この方法でやるなら、極端に短い詩(一行は長くて)を書いてみるとか、変えるのなら、一行を終止形で終わらせないようにするとか、作者が楽しんで色々実験してみることが必要だと思う。



つとむ いがらし

- 1949 山梨県生まれ 群像賞受賞
- 79 「流瀆の島」で小説賞受賞
- 98 「緑の手紙」で読売新聞・NTTプリンター主催第1回新人賞受賞
- 2002 「鉄の光」で文学賞受賞
- 他に「ノンチャン、NONGCHAN」「ワットプノムへ」「破壊者たち」など
- 評伝「詩誌『帰郷者』の栄光と悲劇」

### 言葉の硬度と貫き

今年応募数は少なかったが、逆に全体のレベルは上がっており、予選落ちは減っている。若い層の伸びが顕著で、これまでの実績者の位置を危うくするほどの成長を見せていた。特に奨励賞、佳作、入選は入れ替わりが激しく、その付近は新旧の混在で層が厚くなった。

前回かなり優れた作品を出していても、少し気を緩めたり、ぬるい表現になると、台頭する新しい詩作者たちの前に落伍する。今回はそのことが目立った。続けて気鋭の作品を提出することのむずかしさもあるが、やはり挑戦的な意欲をもって踏み出していくことが重要だろう。

トップクラスは前回と変わらず、心細く思いながら選考を進めていったところ、清水一美氏の「蜘蛛」に出逢って、救われた気がした。

「蜘蛛」は四ページに及ぶ長い詩で、一作の勝負である。蜘蛛の糸の紡ぎ模様とその行為を、空の青さや地のつながりを重ねて、さらに宇宙の虚無の中に深く敷衍している構造が、スケールの大きい問いかけを投げかけている。一つ一つの言葉は、澄んだ硬度を持ち、鋭い掘削力と透明な結晶力を備えている。幅広い、根を深く得た言葉群が、研ぎ澄まされて積み上げられていく緊張感は、現代に妥協しない古典的な格調の高さを得ている。「銀河を編む」——この美しい言葉に、「蜘蛛」の意図が集約されている。蜘蛛

### 五十嵐勉

- 「秋の夜」「夕日を眺める案山子」「鳩との会話」 松原大地
- 「悩乱歌」 十路田道広
- 「AVE MARIA」「冬のくるみ」「空」 恵矢
- 「宛名のない手紙」 関
- 「いつか誰かが気づくころ」「15の心」「白い夜」 工藤朋美
- 「ルネスタージュ」「ララトゥーダン」「アイアムロージン」 ルル
- 「ルンペンザムラー」「なんだらう」他 加藤 淳
- 「No.6」「ネズミの廃墟」「死者の書」 深田 良
- 「ひのとり」 橋本 匠
- 「冬茜」「草深百合の花笑みに」「シュガースポット」 小平田史穂
- 「もはや振り向くことのない水兵の背に滝のような乳が流れる」他 Merongree
- 「テラリウム2」 小林 薫
- 「evidence」 山崎裕子
- 「嘘下拒否」「鳥(肌)のG」 能祖将夫
- 「人魚寿司」「天使の指はしなやかな檻」 蚕月しの
- 「千」「行方」「社会の窓」 貝塚小夜
- 「今ここから」 原のぞみ

### 入選

- 「喜びに包まれている私」 持田 恵
- 「コペルニクス」「心桜再生」「フウライ」 結城悠一郎
- 「生きながら死んでいる」 石塚美奈子
- 「真夜中のアスパラガス」 わたなべ麻里
- 「命の箱」「深海魚」「もしもし」 グリン
- 「手紙」「いつかの私」「かみひこうき」 柚 詠
- 「彩」「荒城に咲く」「てとん」 翁納 葵
- 「愛の辞典」 関根裕治
- 「珊瑚は殺された」「口」「白い息」 さいとうみち子
- 「荒廃都市の真実」「消失と救済の語り」「人魚姫」他 八坂明日
- 「愛のゆくえ」「黄アゲハ蝶とセリの花」他 もりあい陽子
- 「葡萄酒」「時計」「加速度」 船津拓実
- 「永久の契」 憂愁 晃
- 「流転」「日曜日」「現代の映像」 佐藤清助
- 「生きてください」 野木利花
- 「宇宙を消滅させたい」「世界を革める一億年前」他 舟橋空兎
- 「大切な」「想」「海」 宮坂 新
- 「遠夢草の眠り歌」「見知らぬ自己との対話」他 奥田 繭
- 「孤独塔」「プリズマベル」「パレット」 江夏由紀子
- 「ゆらりゆらゆら」「なべしき」「ないものねだり」 高梨友美子
- 「自然」「奇跡」他 北未知子
- 「青の扉」「盗まれたオレンジ」「みどりの旅に」 近藤義康
- 「富良野」「霊峰富嶽」「美ら海」 萩原 巽
- 「ブルーワールド」「星の最期は祈りを待たない」 藍澤祐樹
- 「ある夕暮」 佐藤有介
- 「Rの朝」「川面」「漂う影」

蜘蛛の銀糸から銀河への空間的貫きの巨麗さと同時に、地を血と母でつなぐ時間的な貫きも鋭く、縦糸と横糸の重層が、力強い根をなしている。連による構成をさらに工夫して造形し、タイトルも含めて表現の立体化が施されたなら、さらに見事な詩になっただろうが、とにかく一つの結晶体としてそこに存在している。精進に拍手を送りたい。

もう一つの最優秀作、浅見龍之介氏の「射ゆ獣の冬の旅」は、ばらけて混沌とした表現のなかに、なにか切羽詰まった叫びが内蔵されていて、それが確かに一つの希求として届いてくるものだった。八方破れのなかにも、切り結んでいるものがある。全体に若さを前面に出した体当たりの言葉の賭けだが、確かに一つのものは投じられている。詩は、負けるとわかって博打に賭ける、投企の気合いのようなものでもある。その行為

としては鮮やかに賭けきっている。浅見氏には、今後ひるむことなくこの切り結びを突き進んでいってほしい。それは生活や人生を危うくするということではなく、むしろ逆の安定した位置から命を賭け、魂を載せるその領域を詩人として確保していってほしいということである。

優秀賞の佐山広平氏は、すでに最優秀賞を受賞し、現代詩人賞も受賞している実力者である。古典的な調べの美しさ、みずみずしい感性の流露、遠く記憶を紡ぐ愛惜の匂いなど、七九歳の年齢を感じさせない新鮮な詠歌は、驚嘆に値する。繰り返し歌われる少年の日々の輝きは、夏の光と汗とで煌めく純粋な世界への覚醒のまぶしさとなって、我々の中に回帰の永遠の力を湧き出させてくれる。詩に不朽の生命力を感じさせてくれる点で、やはり際立っている。

芳賀沼さき氏の「罪の蜜」「一族の血膿」「軋む識」は、いずれも後ろから逆に読んでも同じ音となる回文で作られている。一作や二作はできても不思議ではないが、前回から続けての六作で、しかも今回の作品はさらに長く、込められた詩想も深化している。特に「軋む識」は、音の合わせせ以上に詩想の掘削が深まっており、制約があるにもかかわらず、それを感じさせない自由さを達成している。こういう詩はきわめてめずらしい。希有な才能であり、今回さらに一歩前進している表現の形に、賞賛を惜しまない。アクロバットのだとか、いろいろな批評もあるだろうが、才能を大事にして、独自の道としてさらに発展させていってほしい。

言葉の新鮮さ、提出の新鮮さで注目したのは、江田つばき氏と日正士郎氏である。江田氏の「立体パーキング」は、日常の言葉、生活空間の言葉を巧みに新しい視座に置き換えて、現実の構造の破壊と再組立てを大胆に試みている。ここにあるものは懐疑と反抗であり、日常を構成する様々な定型の圧力への反発が弾んでいる。

日正氏の「コオク・スクリウ」は、行や字の大きさをも表現の自由として用い、挑戦的な手法を全体に表して、情動の激しさをダイナミックに叩きつけている。作者が感受し生き抜いてきた現実の激しさが言葉と言葉のつながりを動的にうねらせ、起伏と陰影を濃くしている。悩みと軋轢がむしろ言葉の紡ぎを押し進めている。そこにこの詩の原動力があり、生命力も試みていってほしい。散文も、小説も書けそうな才能を感じる。

「鎮魂歌」[Discours] (滝川閑) は前回に比べて詠歌が深く降りていっている。詩の膨らみは大きくなり、思いが染みわたってきた。特に「Discours」は、短いながら凝結されて言い切っている。こういう七行詩のようなものも一つの可能性だろう。

「祝祭の灯は消され」(小山健) は、豊かな言葉が賑わっていて、それが祭りという宴の終焉の空虚をよく引き出していて、空洞の外側の華やぎの色彩を鮮やかに浮かび上がらせている。他の作品も詩世界の広がりが大きくなっている。前進を感じた。

「エレクトリックサーキット」(洗本ユリナ) はパソコンの機能を感じの彩に對比させて現代の記号処理される生身をよく表現している。捉え方がいい。繰り返しが多いのが効果を減じているが、何を詩にするか、材料のおもしろさは光っている。

「麦踏」(なないろ) は前回優秀賞になった作品と比べると、土から遊離してしまった。土の力強さは失われ、技巧の空転になってしまっている。この作者のユニークな点は、あくまで土との接触にあり、大地の根の力を現代の生身の体で表現するところにある。土の力を体現できなくなると、詩は死ぬだろう。この詩は土と大地を信じていない。かろうじてその残存を感じるのは「脱色をかさねた雪塊を頬になんどもなんどもぶつけ／ひだまりを脱ぎ捨てたい」という二行である。虚飾や技巧はいらない。土に恥ずかしくない本物の地の歌を奏でるべきだろう。「なないろ」というペンネームを使っているようでは、地から滾々と湧き上がる力を受け止めることはできないだろう。

下手な技巧を身に着けすぎて詩そのものをダメにしているケースは少なくない。佳作の「な

がある。それに乗らされ、むしろ翻弄される危うさがあるが、ここまで舞踏し、乗らざるをえず、駆け続けなければならぬのなら、あえてそれに身を委ねる方向にしか、行方は見えないのかもしれない。そんなことまで感じさせる発露のパワーに溢れていた。

小池陽慈氏の「眠れるト音記号、もしくは短歌的惰性の日常」は、昨年に比べ、ややゆるくなっている点、小粒になっている点は否めない。他の常連が多く陥落したなかでかろうじて踏みとどまったのは、「ガラパゴス」という進化史な時間を「手紙は着かない」という日常の普遍性でスケール大きく突き抜いているところに、一太刀を浴びせているからで、このおもしろみは、前回と変わらない一貫性を保持している。

奨励賞の「Prod」(水城古都) は、ほとんど技巧らしい技巧がない単純率直な詩である。しかしその真つ直ぐな言葉の中に、痛切な肯定があり、それが誰の胸にも宿りうる普遍的な発光を得ている。一方ではあまりに異なった運命を与える神の不公平をかこちつつ、なお現在の本質的な自由の恵みを喜ぶ姿勢は胸を打つ。「この美しい青空を／誰にも邪魔される事なく／自由に見据えている／この様な幸福が他にあらうか」はシンプルな言葉でありながら魂に届いてくるものがある。大事にしてもらいたい。

「試作品のラビュリントス」(御園陽樹) はギリシャ神話の語彙世界を現代の都市風景に重ねたおもしろい視点で、技巧も上下の配字構成と斜体を駆使した華麗なスタイルを用いている。後半の変化は躍動していて、試みが舞踏している。この方向をどんどん突き進んでいってほしい。さらにもっと広い世界が開けそう。

「夜」「白」「うたた寝」(深町秋乃) の作者には、もともと詩を作る力が潜んでいる。この力はしかし、現在のような小手先の技巧ではなく、もっと大きく展開することによって発揮されるのが本来の魅力だろう。「夜の影、と眠る」のように、寸断されることで味をつけるちんまりした技巧の多用は詩のスケールを小さくする。前の連を受けての「それはなんだか、血の味のする」が不すように、むしろその展開力に魅力があるのであって、このはばたきをもっとひろげることによって、造形が飛躍しそうな気配がある。この点の技巧は芸の一部として温存し、ストレートの表現

ゼメルヘンに死に際にも敬虔な微笑みを浮かべることができたのか(漆原正雄)も同じ陥穽に落ちている。現代詩は新しい言葉や技法、複雑な手法や難解の奥行きを持たせる傾向があまりに強いため、それが詩として高いもののように受け取られがちだが、それらはよく見れば韜晦に逃げ込む消極的な姿勢で、わけがわからなくすることを高次の位相とする根本的な過ちを犯している。現代詩には半ば腐っているものが多い。このような領域をいくら拡大しても、魂に到達するような強く深い言葉は生まれない。もっと真つ直ぐに、もっと直球で勝負すべきであって、せっかくなスピードのある球を投げるピッチャーが急に変化球に頼るようになっては、魅力がないばかりか、打ち込まれるに決まっている。真の言葉の普遍性はちんたらした技巧にはないことを、胸に銘記すべきである。だからこそ、言葉の創造はたいへんで、萩原朔太郎が言うように、「詩は文芸の貴族で、

散文よりも高い位置にある」と言えるのだ。詩人は現代の流行に乗ったり、主流に追随するような姿勢は戒めるべきである。世界に向かい合うのは、自分しかない。自分の言葉しかない。その言葉を徹底して追究すべきで、その苦闘にこそ独自の詩が生まれる。

この点では「動揺するモールス」(氷瀬憂)も「世界の正しい終わり」(柳一威)も同じで、技巧への安心が、対決姿勢を緩め、安心の上にとっかかり座り込むゆるみが出始めている。一つの成長の過程を息長く見守るしかないが、姿勢に転換が必要な時もあるだろう。

詩作は虚しい行為であるかもしれない。しかし一つの言葉が鋼玉よりも硬度と輝きを得て、それが心の原点にもなりうる。また支点となって世界を転換させる発想と行為が生まれうる。死とも向かい合うことのできる力になりうる。娛樂過剰、情報過多の時代にこそ、真の言葉が光に繋がるだろう。



選考会風景 2013.9.16 アジア文化社にて

蒼を仰ぎ碧にひとり佇む  
葬送は風の間に白く道を拓く  
明け初める夜の端境の光芒  
目覚めの眼差しを深閑は落ち  
疾く光は秋の高い朝に闇を沈め  
玉響の水玉に 黙し目覚める  
波の拡がる紋を見送る眸の  
水底を見上げる蒼白い忘却から  
水面に漲る元始の波動を  
地母し産す四六億年の黙示へと  
落葉の虚無を手練り 銀糸の  
降下に待つ契約の容

同心円に千手を翳す八肢は  
待ち明かす夜の炎心を  
北辰に結い  
星辰の軌跡をなぞる夜の末  
銀河を編む  
中有は明らかに澄み透る  
無間 立ちほだかる非有にまなかいの  
帰性するわたくし以前の相似に立つ  
上昇 渦巻くあらゆる重力に勝る  
貪欲な眸 その視源に捕らわれ  
言挙げせぬ祈りに 生れ来し  
増幅するわたくしの揺らぎ

朝に記す餓鬼の眼差しは  
夜の憶に地母を焼く焔  
わたくしの始に贅を象り  
黄泉還る 肌透く月の辺り  
蜘蛛とし赤き空に糸を紡ぎ  
明かし雲の偉匠を仰ぎ  
風に糸を張り跳躍を試みた日  
天地は薄青い水素の炎と消え  
渴きは青い思念を生み  
生まれぬ先のすがたを追う  
水と火の同期する紋に  
豊穣を受け屠られる先の母  
その血の系譜に饗け  
風に狂える一差しの舞  
水煙は天へ噴き上げ  
分光するその階調を昇る  
わたくしの視  
鉛直に沈降する樹影  
倒立する天に広がる

# 蜘蛛

充溢する空 蒸散する  
わたくしの死  
闇よりも深い光は  
想起する形象に佇む碧  
預言のように仁王立つ蒼  
捻れた円環は閉じ  
無間に開かれる  
私の想念は  
今朝の曙光に塗れ  
木霊する天末を追う波状の  
遁走曲  
干渉する音の間  
和合する音階を踏み鳴らし  
不協する和音を振り散らし  
収斂する延音記号の果てる末  
垂直に屹立する沈黙を受け  
否認を告発する鶏鳴響く  
場 立ち尽くす時制に  
意味を脱ぎ捨てた事象は  
輪郭を研ぎ澄まし 鏡なす  
わたくしの出会いを刻む

燐祭に雲の燃え盛る 甦りへの序  
逆巻く黄金が青銅へ沈降する間  
深く地に眠る贅ら 地母の末  
閉じた眼がわたくしの眼差しに開く  
収束していく視を覆う銀河団  
その眩い旅路に打ち立つ贅ら  
環状を祈る列柱の最中 とりよろう  
屹立する円柱を廻行し  
定まらない死を循環に送る  
呼ぶ声は一条の光の糸を繕り  
遙か光の集まる水の記憶を結び  
一三七億光年を廻る波光を剥がれ  
孤独を下る 一縷のわたくし  
始めを紡ぐ出会いに隠れる  
朝を基層する無辺の空  
その目覚めに落ちる  
無為を枯葉は辿る  
その奇跡が刻む風の紋を  
焼き付けよう 眼差しのように  
貫く唱導は容認の全しことば  
在れ  
その震えを一縷に捉え  
銀河を編む  
やがてこの身は子らの贅となり  
腐身を晒そうとも 与る  
わたくしは在るもの  
継承  
その光儀

# 清水一美

しみず ひとみ  
1960年青森県八戸市生。高校時代ジョン・キーツを知る。大学進学により上京。英文科4年時、堀辰雄を知り、卒業後日本文学科へ編入学。財団嘱託を経て、フリーの校正者に。森敦「月山」に惹かれ、37歳の12月越冬すべく、アルバイトとして八ヶ岳の山小屋に入る。その間、「万葉集」を集中読破。下山後、現職に。一方でおよそ15年放棄していた詩作に取り組むべく、それまで敬遠していた日本現代詩を読み漁る。



## 受賞の言葉

最も愛する指揮者、ルドルフ・ケンペのことばから始めさせて頂く。「さがすべきではない。めぐり合うべきである。さがすということばは、意識的な小細工を意味する。めぐり合いは、作曲者とその音楽に対する献身の結果である」(指揮者ケンペ「尾替善司著」)  
「蜘蛛」は、めぐり合いによって生まれた。朝の克明な陰影の中、人通りの多い参道を避け高尾山を歩いてきた。三メートルほどの木橋を渡る足を止め、何の気なしに脇に目を向けた。そこに彼女はいた。長い脚をゆっくり動かし、銀糸を編んでいた。それからわたくしは高尾山に毎週のように通った。声を持たぬものの沈黙に止まることで、そのことばが降りてくる瞬間を待った。ジョン・キーツは「Negative Capability」という能力を、早急に事実や理由を求めることなく不確かさや不可解さに踏み止まれる、詩人の才とした。それは作品への献身に通じよう。その門を、彼女が多少なりと開けてくれたのだと思いたい。

# 射ゆ獣の冬の旅

もうとうに マンモス 減びていて 当然だに…。

深キ淵ヨリ 3時間ぐらい呼ばわり ようよう繋がつても  
ピアノ線 ぶつつんするがごとくに切れる いのちの電話  
思ひ出冷凍コンテナのなか 眠れないわ 死ねないわで  
自動シャドウよろしく ただ暗くら さまよい出るのだ

星の吹雪に見舞われながら 夜よるよる チャリ転がり  
鴉どす黒く埋め尽くすなか 昼ふらふら つららつらら  
巨大歯車 ここえたのか 月のクッキー 胃袋に穴  
消化されざるカプセルなんか 異物でしか 自然のなか

(路地裏ラジオの 白いノイズの まにまに浮かぶ  
火の輪くぐりのライオン 水回りのペンギン  
了解基礎天秤 まだ危うく 釣り合ってたのに)

垂直の回転木馬は 神々なのか 目眩めく  
水平の観覧車なのが 世間か 誰かれ狂わせる

象牙のチェス駒 ばらけて ひとり 凍てつく王様――。

# teatime garden unknown

最優秀賞

黄金の延べ棒 溶かして 日の光 伸び伸びで――。  
夏のガラスのなかの 緑のエデンよろしく あの園その  
知られざるものに還れる 知られたもの その園にて  
還りゆくほどに 未知なる 充ち満ちゆく日時計には  
数も知らず 影も優しく ほんとうに まったく…、  
まったり待ってるまにまに スルーせる花東あまた  
いつのまに焼きあがったか 遥かなるカボチャのタルトは  
哀しい銀のナイフ届くなら 綺麗に切り分けうるのか  
(さあ皆さま どうぞ召しあがれ 思えば楽しかった)  
どうにも仕方なかった、の 時織タペストリーの  
解き放たれて編み込まれる 幻のまことの鳥の  
歌うは神聖電話番号(オニイサン イイ花屋サン)  
噴水の光り微粒子 戯れたり 止んでみたり  
世の常を葉擦れのココロ さやめいたり 病んでみたり  
暫定リンクの指環は閉じて 結ばれよう、謎の園――。  
なぜこのカタチで在るのか ポットも カップの取っ手も  
星の降る夜な夜な 沈黙スフィックスとか 宿命とかも  
哀しい銀のナイフなんかも――。夏だったガラスのなかの  
謎の園 いま宇宙の樹は あと葉っぱ散るばっか

あてどない弓矢も 喰えない獣も のけ者 互いを求め？  
険の闇で デタラメ非在着信よろしく ふつ、と射らる。  
刺さった鏃は 砕かれた 祝福の石のカケラかなにかか  
見知らぬ誰かが飛び込んで 乱れたダイヤの煌めきなのか

(幼い頃のクリスマス 白いノイズの まにまに  
蠟燭の焰のぬくみ 柀ひらきの痛み いまも指先に  
先行き閉ざす粉雪 降り積んでた 窓のそとに)

無限雪野原 何度も死んでる そのときどきに  
光の躑躅つしの 眠りの羊の メール来るよろし

電車のホームに パッション・フルーツ 静かに響け――。

## 浅見龍之介



浅見龍之介  
あさみ りゅうのすけ  
1983年生まれ 乙女座  
獨協大学外国語学部卒業

ただ在ったテラコッタ やにわに 埴輪に 還れるなら  
さいわいに滅びゆきながら 夢のカボチャのタルトを眠らん  
生きながらえた罪咎つみよが つぐなうのは 疲れるから、

紅茶つく、なう …。すり減った割れカップ  
穏やかな 静かな 涙の日なるかな 人知れずして

(哀しい銀の匙投げたなら五次元で曲がるレクイエム)

### 受賞の言葉

安らかに閉じられた時空を、呪文のように響く言葉で、音楽のように織り成したいと願ってきました。月照る湖であり緑の浮島であり夢の庭であるような静かな閉域のうちに、豊かな謎を結びたかったのです。できれば明澄な愉悅を湛えた作品を書きたかったのですが、シュールベルトの《冬の旅》を毎夜のように聴いていた暗い中学校時代が未だに終わっていないことを、首都圏を襲った大雪に思い知らされました。

人間関係ばかりが他者との関わりではないし、個人性を越えた在りようは社会性ばかりではないのだから、閉じることのうちにこそ別様な開かれを求めよう、などと長年思い詰めてしまったのは、浅間高原の故郷で異物のように過ごした幼少期のゆえでしょうか。幼い思い出が詰まった重苦しい玩具箱には、そもそも知識だの教養だのを収めるだけの容量がありませんでした。

叶うならば子供時代の夏の目に帰り、見上げるばかりに背丈を伸ばしたトウモロコシの広い畑を抜けて、その向こうの農家から聞こえてくるピアノの音に、もう一度身を澄ましにゆきたいと願わずにはいられません。

# 存在の美しい日々

# 佐山広平

夏の匂いに光が煌めく日々  
 油蟬が木々の幹に鳴き声を滲ませ  
 みんなみん蟬が木の幹に愛を刻む  
 存在の優しさに  
 山あいの道の石を踏む意識への裂け目  
 存在のいたみに  
 僕の中の少年が現れる

光が墓の庭に眩しく溢れる日  
 祈りの花々が輝き  
 線香の香りが満ち  
 空に立ちのぼる  
 匂いの陽に囁く  
 存在が透きとおる  
 小鳥たちの祈りが甃に注ぐ陽に  
 僕の中の少年が現れる

蜻蛉の羽の滑走する池  
 水面の漣の中  
 放物線を描く遊戯の誘いに  
 透明な捕虫網が舞うと  
 林の中の黄あげはが羽化の記憶を辿り  
 限らない空への飛翔をこころみる  
 こならの幹をかすめ  
 くぬぎの葉末に触れながら  
 愛を囁く気配に  
 僕の中の少年が現れる

存在の美しい日々  
 祭りの稚児を羨んだ社の庭  
 担任教師の劇への配役に  
 はにかんだ教室の追憶  
 白い少女の家の籬檀に魅せられ  
 大きな屋敷の庭に落ちる滝に意識を沈め  
 凍りついた池の深みに  
 沈黙の生を生きる錦鯉の静かな眼に瞞められる  
 存在の美しい日々



さやまこうへい

## 佐山広平

1934年生まれ  
 中学校卒業後、菓子問屋の小僧、手作り鮎の職人見習い、印刷工場の工具（植字工）の間に愛知県立瑞陵高等学校定時制に入学し、卒業  
 国立愛知学芸大学国語科卒業  
 愛知県立高等学校の教諭として6校を歴任  
 「文芸思潮」現代詩賞当選1回・優秀賞過去2回・奨励賞2回  
 2010年詩集「時の彼方へ」で「文芸思潮」現代詩人賞受賞  
 「宇宙詩人」同人  
 「名古屋文学」同人  
 詩集「散乱する実在に」（近代文芸社）・詩集「水の流れに」（アジア文化社）小説「華やいだ虚無を求めて」（日本文学館）  
 愛知県春日井市在住

## 受賞の言葉

詩を書くとは僕にとって何を意味するだろうか。それは一つには自己存在の確認であり、また書くとはいくらかおかげさへに言えば、紀貫之が土佐守の任果てた後の長い失業時代、「土佐日記」を叙述することによって生きる核としたように、生きることそのことでもある。

だがそれ以外に僕にとってきわめて重要なことは、詩語の様相を自己につきつけながら、世界へ提示することでもある。

詩をかきはじめた時以来、僕は常に詩における言語表出と散文における言語表出は異なったものであるべきだと思いつづけてきた。とは言え、言語表出には意味の造形が不可欠である。そうした時、無論僕の言語表出が詩と散文とどのように異なるのかとその明確さを迫られた時には、僕はいくらか戸惑うかもしれない。しかしながら僕は常に詩の表出と散文の表出に異なるものを生み出そうとしてきた。

そうした僕の詩について「文芸思潮」の評者は第一回においては、優秀賞を授けた。僕は驚くともに喜びに溢れた。その後、当選を一度、優秀賞を一度、奨励賞を二度いただいた。その他また第二詩集「時の彼方へ」（アジア文化社）で現代詩人賞をもいただいた。

そのことはおかげさへに言えば、僕が書くこと、すなわち生きること、手が差し伸べられたことを意味する。

そして今度三度目の優秀賞が受けられた。それゆえ今僕は、言語表現すること、書く自己確認の自己存在への投与に感謝せねばならない、としきりに思っている。

# 立体パーキング

背だけ伸びてしまったまま、足の広さ変わらず、靴ひもは慣例にそって結ぶ自分階段をのぼるとき、きつと上には新しいスペースにいくつもの展示があって、豊か有益とかではないかと思っていた、社会人の心細さにシステムな機構で囲おう  
(耐震しても倒れることはある)

将来をたずねられ  
母の手を引きスーパーマーケットではたらく友達の母へつくった海をひき  
そこに浮かぶは、手を黄色く染められたたたかな手押し相撲の陣地  
目印ははじめての飼育で歯を入れたときに感じた舌のみどりを中央に植樹  
家は建たぬ、ここは住むところでなく、行動の仕舞い場  
整理整頓の時間はあっても、照らすライトがない  
押しこみ続けよう

胸のいたみのオートマチックを目視しあった、ぶきつちよな妹との部屋は地下の隅へ  
今も変わらず定位置で涅槃する父の実際の弱さはさらに地下深く

(畏敬するものは隠しておきたいのだ)

母はまだ仕舞えない現役の音叉

思い返せば血のつながり以外、信じていない

現実から目をそらすとつくったシャボンの壁  
管理人は数式の道に迷った制服のころに頼もう

土地代は労働

纏足をしてまとまった歩数も、つまりはでくのぼうになる童話のようなあきらめ  
心拍を聴けば、工事はずつと行われている

## ターミナル

原宿のカワイイへ向かおうと嬉々をまとって友人と改札へ入り

田んぼの景色 スライドさせベルがふるえる目下

ゆれがつたわる足裏にくすぐられ笑わされ

継ぐためのターミナルへおりと

ふと友人の携帯電話がふるえる

どこから沸くのか

大量の誰かの友人がすれ違い追い抜く最中のホーム

たしかな未来をつなぐ黄色い電子時計を見つめる私の横で

矢文に青ざめる友人にわけを聞けば

父の胃が燃えてしまった。と素直に言う

私は冗談のように、うそだあ！としか言えなかった

ふたりで階段をおりる

ターミナルは流線型のトイレと土産物のバームクーヘンを抱き

たくさん誰かの友人で満ちる体内

毛細血管に乗れ

まだ父上のターミナルも赤い

来た道を引き返すのはあたたかいうちならたやすいはず

ゆれに耐えかねた友人の頬に

私は浮ついた気持ちだけをあてがって共に流れた

## 江田つばき



えだつばき

江田つばき

1989年千葉県生まれ  
詩、短歌、小説など書いています。  
ブログ<錯覚キャベツ> <http://ameblo.jp/march24-c5/>  
第5回中城ふみ子賞佳作(短歌50首「分子の集う場所」)  
第8回「文芸思潮」現代詩賞奨励賞(目付変更線/年齢詐欺/行列)

### 第9回「文芸思潮」現代詩賞優秀賞

#### 受賞の言葉

私は詩のほかに、短歌や小説も書きます。

表現にさかめはない、その中でもとにかく詩は自由です。まだ言葉になっていないもの、絵のような、概念のような、脳からこぼしていくように言葉を書きつけていくうちに、それは思わぬ方向へどんどん広がります、私はそれを表現する言葉を自分のなかから探すことができずに、追いつけず、もやもやすることも多いです。

でもそれを、さらにもやもやした日常からこっそり抜け出して、向き合っているとき、私は今、正しいことをしているのだと満たされた気持ちになります。

昨年の奨励賞に引き続き、このたびは優秀賞を本当にありがとうございます！

これからの自信になります。

凸面レンズに巻き戻される映像

今しがた灰色の雑踏からSUNB色した遠い森林

粘膜の桃色はターミナルのもつ建築の妙技

わたしたちは色を持ってすすむ

友人の目の前を流れつづける水にもなにかの色は映っている

わたしたちはふりだしにもどってわかれた

(書いて今だから言えるのだが) 喪に服したタクシーに友人を乗せわたしたちはビルも、コンビニすらもない無人駅で途方に暮れた

帰って布団にでもうもれようか

どこへ行くにもここは出発をする場所



持っ

ているありつたけの本  
のページをめくる活字の中  
にそれはない何時間もキー  
を叩き続ける検索ワードが  
わからないのに目をこらし  
たってモニタにはどんな暗  
号も隠されてるわけじゃな  
い答えは外からはやってこ  
ないそのうちかたっぱし  
から見はじめそうな気がする

映画DVDまた絵画バベルの  
図書館は際限がないすべて  
は読めない一生かかっても  
とりあえず手のとどく音楽  
を耳に叩きこんで脳を震わ  
せる掻き回して何も考えら  
れなくなったら浮かび上が  
るものがあるかも鏡のよう  
な黒い液体の壁をまわるそ  
れを探せ探す？僕はいつた  
い、何を何の確信があつて  
?.....渦?.....メルシユ  
トルウムの?.....黒い底の  
ない水面から銀の柱がきつ

# コオク・スクリウ

## 日疋士郎



ひびき しろ

### 日疋士郎

2001年、病を得て化学メーカー退社。数年に及ぶ療養の日々。  
2004年、療養半ばにて、10年以上中断していた演劇活動を再開。演劇  
集団「ぶろじえくと☆ぷらねっと」旗揚げ。代表・劇作・演出・役者。  
学習塾講師としても働きはじめ。  
2006年より、エッセイ「神楽坂逍遥」連載中。(メールマガジン「週  
刊神楽坂ニュース」(隔週発行・けやき舎))そろそろ連載180回。  
2011年、インターネットを通じて日記のように書き続けていた詩作  
を、見直すようになる。詩の投稿をはじめ。  
2012年秋より、21系アンソロジー詩集「きらる」(季刊・太陽書房)  
に参加。  
2013年11月・12月に初めての詩の朗読公演を東京都西荻窪、駒込に  
て行う。作・演出・出演。  
ぶろじえくと☆ぷらねっと→<http://propla.pl.bindsite.jp/>

# と立ち上がる、

天を穿つためにたぶんそこ  
には天には底なんかないの  
だらうなめらかに螺旋を描  
いて切り込んでゆけるのだ  
ろう輝く芯へ加速しながら  
やわらかい優雅なナイフま  
るで船  
だ  
そのために  
いまは  
ただ目を閉じて  
できればそっと冷やして  
鼓動も血の流れも  
ゆっくりめに  
浅く息をして  
体温は低め  
遠くの音を  
ほんやりと聞くように  
読むともなく読む  
細胞に刻みつけられた文字を  
きれいなつめたい  
水が飲みたい

### 受賞の言葉

……昨夏朝突然に、電話よりあかるい声ひびく。親友から長  
女自死の知らせ。ほどなく恋人と別れた。いくつかの問いがの  
こった。抱えるものを作品に盛り込むなんて、組板にほんとの  
つけるなんて、カッコ悪いとずっと思ってきたけど、どうも違  
うんじゃないか。なぜ書いているんだろ。なぜ舞台にあがるん  
だろ。なぜ日々七十人のこどもたちと接するんだろ。なぜ棺の  
なかにいるのは僕じゃないんだろ。おかしくないか？ なんか  
サボってないか、僕？ で、詩の朗読公演を二本打つことにし  
た。芝居と違って恥ずかしい、おそろしい、そこにフィクショ  
ンという逃げ場はない、自身の底の井戸をきりきり掘るしか  
ない。ジェンダー。セクシャルマイノリティ。いじめ。鬱。引き  
こもり。いくつかテーマが見えてきた。どれも生半可じゃ手  
出せない、とずうっと避けてきたものだ。腹はまだぜんぜん据  
わってない、さぐりさぐり、こわごわの足取り。……今秋夜突  
然に、電話よりあかるい声ひびく。編集長から優秀賞の知らせ  
いっしゅんぼかん、としてほどなく、しずしずとひかり湧く。「笑  
って組板にのれ」って、どっから綺麗な声で聞こえてきたよ  
うだ。

# 眠れるト音記号、

# もしくは短歌的惰性の日常

ささくれのおたまじゃくし？  
いいえ

(午前二時 乾いた喉の 罅割れの 奈落にふっと 灯る単眼)

ヒトの歴史と歴史のヒトは  
樹形図の枝葉に吊られ、ぶらぶらの  
ト音記号なのかもしれない

ほんとうは  
しつぽの「による」を支点にするんだ、そしてくるくる  
踊りたいんだよ (踊りたいんだよ)

(鈎針の 生殖器から 漏れてくる 毒の玉水 ぶるりと揺れて)

そういえばゼンマイはおぼろげな記憶のなかで  
呆けた陽だまりの永遠のなかでカリコリ、カリコリ巻かれてたよねえ  
あるとき地球は音の鳴る  
具体的な  
玩具だったのにねえ

(ゆすり蚊の ような震えで 存在の 底にぼつんと すくんでる性)

キミがキミであることを諦めてからキミが始まったように symphony は  
symphony であることを置き去りにして初めて  
たしかな、ためいきとなる——そうこれが  
蘇生というやつだ

(ここは第 何楽章なの？ ヒトの群れ 歴史の譜面 はいはいしてる)

世紀と世紀のあいだのうつろへと

浮遊するように落ちてく十六分音符の連なりが

眠れる赤子の口に

つぶつぶ吞まれてゆく、時間というのは

歪曲した

五線譜なのかもしれません

(花芯から 腐るつぼみの ごと耳に じんじんんと 腫れてく鼓膜)

(淘汰され ア・シンメトリーの 左目も 漏電しつつ 羽化に擬してる)

明日というものはもうきつと

ガラパゴス諸島の枕もとに、折り目正しく

ワイシャツみたいに畳まれているのだから

創世記の一ページ目を破って

ほつれた紙の繊維を

舌先にざわざわまさぐるのもいいかもしれない、ほら

キミはボクは (キミはボクは) 目に見えない黒ヤギさんだよ！ (黒ヤギさんだよ！)

めりめり

嚙下してしまうのさ

お手紙は着かないのさ

(目覚めては 夜が闇でも 無音でも ないことを知り 喘ぐ息継ぎ)

たったひとつのスタッカート、それをまさぐる前脚さえ、生えてこないなんて……

(タクト振る ミトコンドリア ぼくらには 微視的視覚 なくておののく)

前脚さえ

第9回「文芸思潮」  
現代詩賞  
優秀賞



## 小池陽慈

こいけ ようじ

### 小池陽慈

- 1975 北海道札幌市生まれ
- 94 埼玉県私立自由の森学園卒業
- 96 早稲田大学教育学部入学
- 2002 早稲田大学大学院教育学研究科入学 (2005 中退)
- 07～13 予備校にて、現代文、古典を指導。
- 11 第7回「文芸思潮」現代詩賞優秀賞受賞
- 11～13 詩誌「詩と思想」投稿欄に入賞数回、佳作数回
- 12 第8回「文芸思潮」現代詩賞奨励賞受賞

### 受賞の言葉

ほくには「文学的センス」がありません。ほかの人の書かれた作品を読むたびに、そのあふれんばかりの才能に圧倒され、「はあ……」とため息をもらしてしまふこともしばしばです。ときには、どす黒い、嫉妬の感情にとらわれてしまうこともあります。その作品のすべての行、すべての文字を、余白を、息づかいを、油性マジックで、ぎゅ、ぎゅ、ぎゅ、と、塗りつぶしてしまいたくなる。

ほんとうに、だめだな、と、思います。計算に計算をつくして、計算外のトラルの因子をも、計算的に構造化して、推敲に推敲を重ねて、形を持つに至った、自分なりの、「傑作」——それが、見も知らぬ人の、おそらくは、息を吐くように、ふつ、と刻まれた(と思われて、しかたないのです)、何気ないフレーズ、さらさらとした一行によって、無残に、フリーズさせられる。

その一瞬の、鬱々と——そして——快感、のために、ほくは、あくせくと辞書を引きながら、今日も言葉に耽溺しています。明日も、あさっても、同じことでしょう。

たぶんずっと、そうだと思います。

# 軋む識

聞いた時世の軋る隙に、自己の家畜化を辞す  
 地の動く贖物を見る凍火  
 野にて暗い轆死待つ蔓穂  
 四有の苦悶に誘う、世の甲斐無い箴言  
 下手な可能紡ぐ長き淘汰  
 謳う虚妄にし難し恋想う  
 雪の圧生き延びた軋み  
 桜積もる庵と引き鴨  
 ……丹色の垂れ幕に神威の矮化を見、世の悪意が漏れ出す  
 誰もが幾鴉の黄泉を飼い、  
 環の因子に組まれた呪いに腕き、  
 独り老いるも辛く淋しき旅の帰一  
 あの杞憂も追い越したが死に副う詩歌う、  
 時が風ぐ無痛の彼方  
 変幻し居ないかの様な罪人も、  
 垢膿絞る慎ましき零落  
 手に伸びている滯の裳が  
 悪業の千条を描く  
 冥土の古寺に帰する死期の予期と  
 待機

# 罪の蜜

唾と蜜が私と髪濡らし、  
 地肌の艶も好く……。  
 何れ去る夢と妄愛こそ、  
 憂き世の快哉  
 萎えくすんだ媚態が婉麗  
 明日無き秘密持つ身  
 悲喜成す哀憐描いた美談  
 救えない猜火の良き、偽装  
 恋い合う求め、許されず、  
 幾夜も蜜のだ……。  
 恥知らぬ身かとした、  
 ——我が罪と罰。

# 芳賀沼ささぎ

第9回「文芸思潮」  
現代詩賞  
優秀賞

芳賀沼ささぎ

はかぬま ささぎ

1989 東京生まれ  
非常勤職員  
神奈川県横須賀市在住



## 受賞の言葉

月並みだが、せっかくの機会なので自分に問うてみた。お前にとって回文とは何なのかと。案の定、答えは浮かんでこなかった。自分が何故こうまで、回文という形態に固執しているのか、未だに訳が分からないというのが、どうやら私の正直な感想らしかった。ただ私は、自分が好きだと感じた言葉達が、あの排他的な鉄則に縛られた回文という機構にびたりと嵌り込んだ瞬間の、えも言われぬ恍惚と充実を感じたいから、ただそれだけのために、今まで回文というものに取り組んできたのだろう。取り組まずにはいられなかったのだろう。だから「書きたい」という、漠然としているのに逃れられない衝動だけを頼りに、私は回文としての詩を生み出してきたのだろう。

回文という性質上、どうしても言葉遊びという側面が強調されがちになり、純粹な詩としての評価が下しくかったのではないかと思われます。かつ、回文の詩にある程度の評価を与えてしまいう事によって、従来の詩の文法を重んじ、かつそれに則って詩作し、そしてそれを尊び誇りとする方々からの批判・反発があるかもしれないだろう事を予測するのは容易いとは言え、にも拘らず、今回このように評価して下さいました審査員の方々には、尊敬と感謝の念で一杯です。本当にありがとうございました。

ただひたすら、遊べるうちに遊びたい。それだけが、私のような足元の覚束ない人間にも唯一一定かな、今後の道標かもしれませ